



終わりの予感：『コリンヌ』のヴェネツィア

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-09-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂本, 千代 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/14578">http://hdl.handle.net/10466/14578</a>

## 第2回講演（1）

# 終わりの予感

## ——『コリンヌ』のヴェネツィア

坂本 千代

ジェルメーン・ド・スタール夫人が1807年に出版した『コリンヌ、あるいはイタリア』（本稿では『コリンヌ』と略す）は19世紀前半のヨーロッパで大いにもてはやされ、作者の同時代人たちおよびその後の世代に大きな影響を与えながらも、現代においては比較的にかえりみられることの少ない作品である。この点では、彼女の恋人であったバンジャマン・コンスタンの『アドルフ』が現在もフランス心理小説の傑作として取り上げられ、ひろく読まれているのとは対照的である。日本語訳も『コリンヌ』は1種類しかないのに対して、『アドルフ』の方は少なくとも9種類存在している。この違いはどこからくるのだろうか。両作品とも男女の恋愛を扱っており、その主人公にいくらか作者の面影をただよわせ、その悲劇の顛末に作者の経験した恋の一部を投影している点では共通している。だが、コンスタンの作品が恋愛とその心理（特に恋が冷めていく過程）を徹底的に描き、それ以外の要素を極力排しているのに対して、スタール夫人はこの小説の中に当時のイタリアをめぐるさまざまな考察や文明論・文化論を投入し、さらに一種のイタリア観光案内のような趣さえ加えているのである。『コリンヌ』のこの点が19世前半、まだまだ外国旅行が一般的ではなかった時代の西ヨーロッパの人々の異国趣味や知的好奇心を刺激したのである。



図版1：スタール夫人



図版2：コンスタン

本稿ではまずこの長編小説の主題について考察したあと、ヴェネツィアでのエピソードについて検討する。これは小説の後半の山場であり、イタリアにおける主人公たちの物語がひとまず終わって、その後の破局に向かう直前のエピソードである。スタール夫人はなぜ1795年のヴェネツィアを主人公たちの別れの舞台として選んだのか、そこには何が描かれ、どのように解釈することができるのかを中心に、この本の読解の一例を示すが本稿の目的である。

## 1. スタール夫人と『コリンヌ』

のちにスタール夫人となるジェルメーヌ・ネッケルは1766年にパリで生まれた。父はルイ16世の財務総監を務めたジュネーヴ人の銀行家ジャック・ネッケルである。平民ながら大金持ちの有力者のひとり娘であるジェルメーヌは、幼いころから英才教育を受け、母のサロンでもてはやされる天才少女であった。彼女は1786年にパリ駐在のスウェーデン大使と結婚してスタール男爵夫人となり、その知性と社交性で当時のパリの有名な社交サロンの女主人となった。やがて、1789年にフランス革命が勃発する。スタール夫人は最初のうちは革命の理想に共感していたのであるが、国王

夫妻が処刑され恐怖政治が始まるとフランスから脱出せざるをえなかった。



図版3：少女時代のジェルメーヌ・ネッケル

革命の混乱のさなかナポレオン・ボナパルトがフランスの救世主のように登場すると、夫人は彼に期待して接近を図るが、彼のほうは彼女の思想傾向、作品、取り巻きの人々を嫌った。1802年の小説『デルフィーヌ』はナポレオンの怒りを買って、スタール夫人はパリ立ち入り禁止、ついで国外追放となった。そこで、スイスのジュネーヴ湖畔のコペの城館を拠点にスタール夫人の周りにはナポレオン体制に批判的な知識人たちが集まることとなった。彼女は1803年から4年にかけてドイツを訪ね、のちの名著『ドイツ論』の構想を得たが、ドイツで知り合った人々によってイタリアへの興味を掻き立てられ、1804年12月から翌年にかけてイタリア各地を旅行し、その時の体験などを駆使して書きあげたのが『コリンヌ』であり、その内容は次のようなものである。



図版4：コペの城館

スコットランドの貴族ネルヴィル卿オズワルドは父の死に目に会えず、鬱屈した日々を送っていたが、意を決して南国イタリアへの旅に出た。メランコリックな彼は心を閉ざし、外の世界にはあまり関心を持ってないまま旅を続けてローマに到着する。その翌日、当時のローマで人気の高い即興詩人コリンヌがカピトールの丘で栄誉の冠をいただく式典があることを知ったオズワルドは、興味をそそられて会場に出かけ、若く美しく才能にあふれた天才女性を目の当たりにする。謎に包まれたコリンヌは自由で気ままなひとり暮らしの、浅黒い肌に黒髪的美女で、社交的な女性であった。華やかな彼女と知り合いになったオズワルドはすぐに彼女に惹きつけられ、コリンヌも彼に恋するようになる。

やがて、恋人たちはナポリに旅行に出かけるが、ローマに帰ってくると伝染病が蔓延していてコリンヌも感染してしまった。献身的なオズワルドの看病で快復した彼女は彼とともにヴェネツィアに向かい、そこで静かで幸福な生活を送った。だが、イギリスとフランスとの戦争が激しくなり、帰国命令を受けたオズワルドは故郷に戻る。彼は母国の秩序と安楽さと豊かさの中に身を置いて心安らかになり、父親が彼の結婚相手にと考えていたルシールという若い娘にしだいに心を奪われていく。彼女は金髪で色白、控えめで家庭的な女性であり、実はコリンヌの異母妹でもあった。その後

オズワルドとコリンヌの間には悲劇的なすれ違いが重なって手紙も届かない状態が続き、ついに彼はルシールと結婚してしまう。数年後、彼は妻と娘を連れてイタリアに赴くが、不治の病にかかっていたコリンヌは彼に決して会おうとはしない。しかし、彼女はオズワルドの幼い娘にはイタリア語と音楽の手ほどきをする。やがて、衰弱したコリンヌはオズワルドやルシールらに囲まれて息をひきとるのであった。

以上があらすじであるが、『コリンヌ』の主題は、まずなによりもヨーロッパの北（イギリス、ドイツ、そしてフランスも含む）の文化と南のそれとの出会いとその影響であろう。小説の冒頭部分、ローマに到着したばかりのオズワルドが、カピトリノの丘で詩人として冠を授けられる儀式で初めてコリンヌを目にする部分を読んでみよう。

ひとりの女性の運命に与えられるこの大がかりなお披露目ほど、イギリス人の習慣や意見になじまないものは確かに他になかった。だが、想像力によるあらゆる才能がイタリア人に抱かせる熱情は、一時であるにせよ、外国人にも乗り移るのである。<sup>1</sup>

聞いたことすべては彼にとって、コリンヌが社会で最もあいまいな階層に属していることを示していた。しかし、南ではあまりに自然に、この上なく詩的な表現をするので、言葉は、空気からくみ取られ、太陽から靈感を得ているかのようだった。(25)

この美しい空、この熱狂的なローマの人々、そして何よりも、コリンヌがオズワルドの想像力に衝撃を与えた。自国でたびたび彼は政治家が人々の肩車に乗せられて祝福されるのを見たことがあったが、ひとりの女性に対して、ただ天賦の才能によって名を上げた女性に対して敬意が

---

1 Madame de Staël, *Corinne ou l'Italie*, Honoré Champion, 2000, p.23. なお、今後本書からの引用文はページ番号のみを引用の終わりに示す。また、日本語訳については佐藤夏生訳『コリンナ』（国書刊行会、1997年）を大いに参考にさせていただいた。

表されるところを見るのは初めてだった。(26)

このようにコリンヌとの出会いは、彼にとって、祖国（スコットランドを含むイギリス）とイタリア、北の国と南の国の出会いであり、それは彼の価値観や美意識に大きな衝撃を与えるものであった。『コリンヌ、あるいはイタリア』という題名にはっきり表れているように、女主人公コリンヌは理想的なイタリアの化身として描かれている。

彼女をごらん下さい。我々の美しいイタリアのイメージなのです。我々が運命づけられている無知、羨望、反目がなければコリンヌになるのです。(31)

一方、スコットランド人オズワルドはその生い立ちや性格、考え方などすべてがヨーロッパの北部、とりわけ英国的なものの典型だという設定である。

ところで、18世紀後半から19世紀にかけて、まるでそれまでのギリシャ・ローマ文化や文学を規範とする古典主義的な美意識から競って逃れ出ようとするかのように、ヨーロッパ諸国は自国のルーツや、土着の古い民話・伝承を探し出して称揚していた。ドイツ語圏で『ニーベルンゲンの歌』が注目され、スコットランドでは古代ケルトの叙事詩とその詩人オシアンが発掘されていた。これらは古典文学とは全く違うやり方で感性に訴えるものであった。『コリンヌ』においても、主人公がオズワルドに向かって、オシアンの詩とラテン詩を対比して次のように言う場面がある。

自然を感じ取るにはたいへん異なる2つの方法しかないのです。古代の人たちのようにそれを愛すること、つまり多くの華麗な形でそれを完全なものにするか、あるいは昔のスコットランドの吟遊詩人たちのように神秘への恐れや、不確実なものや未知のものが引き起こす憂鬱に身を任せられるかなのです。オズワルド、あなたを知ってから、私は2番目の方法が好きになりました。(402)

一方オズワルドも、最初のうちこそコリンヌが代表する明るく端正で熱狂的な南の人々とその文化にとまどったものの、やがて彼女をとおしてイタリアを理解し馴染んでいく。

彼は英国を忘れさえしていた。未来にたいしてはイタリア人たちの呑気さのいくらかを取り入れていた。(405)

このように北の男と南の女が出会い、恋をし、お互いに大きな影響を与えあうのであるが、18世紀末から19世紀初頭のヨーロッパ、つまりフランス革命後のナポレオン戦争時代の政治状況と、男性側の優柔不断が悲劇を生むことになるのである。18世紀後半から19世紀にかけてイギリス（そしてのちにはドイツも）を筆頭とするヨーロッパ北部の文化の優位性は決定的なものとなり、古典古代の遺産を継承している南部のそれを圧倒してしまったのである。

それではここでヴェネツィアでのエピソードに目を向けよう。これは小説の後半に位置し、第15部7章から第16部3章にあたっている。1795年の秋に主人公たちはブレントア河経由でこの都市に入る。ちょうどその時、ラゲーナ（潟）にある島から3発の砲声が聞こえ、ひとりの女性が修道女の誓願をしたことが知らされる。コリンヌはそこに不吉な予兆を見た。

次に、ふたりの物語を追う前に語り手はこの町の政治体制や習俗や歴史について考察を繰り広げ、その後で読者はコリンヌとオズワルドのヴェネツィア散策についていくことになる。彼らはドージェ宮、アルセナーレ（海軍工廠）、サン・マルコの鐘楼を尋ね、ゴンドラに乗って町じゅうをめぐる。

一方、コリンヌがヴェネツィアに来たことが知れると、あちこちから招待状が届くようになる。そして、ぜひにと望まれた彼女は、ある貴族の館で当時人気のあった喜劇の主演を演ずることになる。そして、劇は大成功を収めるが、遅れてやってきたオズワルドは、その夜にイギリスに向けて発たなくてはならなくなったことを告げる。

コリンヌの家に戻ったふたりは悲嘆にくれながらも1年後の再会を誓

いあう。やがて午前3時に迎いのゴンドラが現れ、オズワルドを運び去る。その直後にすさまじい雨と風が起り、コリンヌは恋人を呼び戻そうと外に飛び出るが、嵐のため、彼の乗った船を追うことができない。彼女は興奮状態のまま夜明けまで過ごす。そして、オズワルドが無事にラグーナを越えたという知らせがやっと届いて彼女は喜ぶが、その後は不安と苦悩に苛まれる孤独な日々を送ることになるのだった。

## 2. 18世紀末から19世紀初頭にかけてのヴェネツィア

それではここでスタール夫人のフィクションをいったん離れて、ヴェネツィアの歴史を振り返っておこう。11世紀から15世紀ごろまで地中海貿易を手中にして繁栄を誇ったヴェネツィア共和国であったが、16世紀になるとその栄光が陰り始め、もはや地中海の商業やヨーロッパ経済の主役とは言えなくなっていた。しかしながら、ヨーロッパじゅうで有名になっていたカーニヴァルなどの華やかな祭りや、すばらしい劇場やカジノの建設などによって、17世紀以降においても、ヴェネツィアはヨーロッパ各地から多くの人々をひきつける魅惑にみちた町であった。そしてこの時期に、中世以来の繁栄を支えた、地中海貿易という経済的な基盤を失い、実直な伝統から逸脱した爛熟と退廃の時代としての近世ヴェネツィアのイメージが固まったのであった。18世紀末に迫った共和国の最後に向かつて後戻りできぬ道をたどっていたのである。

ヨーロッパ的規模で眺めると、まず1789年にフランス革命が勃発し、93年には国王ルイ16世が処刑された。そして、国王の処刑という事実で、一挙に反フランス共和国で団結したヨーロッパ各国は、四方からフランスに攻め入ったのであった。アルプスからはオーストリア・サヴォイア連合軍が、ピレネーからはスペインが、北西方面からはイギリスとオランダが、北東からは、オーストリアとプロイセンが迫ったのである。だが、最初は防戦一方であったフランスはやがて反転して、各国に進軍するようになってくる。ヨーロッパ全体が戦争に巻き込まれる大混乱時代の幕開けである。フランスをめぐるこのような国際情勢の中でヴェネツィア共和国は中立政

策をとりつづけたので、処刑されたルイ 16 世の弟のプロヴァンス伯爵（のちのルイ 18 世）はヴェネツィア領のヴェローナに亡命を求め、ヴェネツィア共和国政府はそれを許可している。彼は 3 年間その地にとどまったあと、1796 年フランス側の圧力により再び亡命の旅に出ることとなった。

『コリンヌ』のヴェネツィアでのエピソードは 1795 年の秋に展開する。そして、ちょうどその頃からナポレオン・ボナパルトという戦争の天才の名がイタリアに知られはじめていたのであった。『コリンヌ』のヴェネツィアでのエピソードの翌年である 96 年に、ナポレオンはニースのイタリア方面担当フランス軍総司令官として着任した。そして着任直後の 96 年 4 月 10 日、すでにフランス領であったジェノヴァの西で行なわれた戦闘が、当時北イタリアを支配していたオーストリア軍とナポレオンの最初の戦闘となり、5 日間続いたこの戦いはフランス軍の勝利に終わった。そのあと、トリノを獲得したフランス軍は、なおも東進を続け、96 年 5 月 10 日、ミラノの近くで再びオーストリア軍と対戦した。フランス軍はこれにも勝ち、ミラノを占領する。ミラノ公国領と国境を接しているイタリア本土のヴェネツィア属州には、ミラノからの難民が押し寄せ騒然となっていた。本国に向かって退却するオーストリア軍を追いかけてフランス軍がヴェネツィア共和国領に入ってくるのは避けられないからである。そして、予想どおり、まもなくチロルへ向かって退却を続けるオーストリア軍と、それを追ってきたフランス軍で、本土のヴェネツィア領は埋まってしまった。そして、もはやオーストリア軍もフランス軍も中立の立場を守るヴェネツィアの事情など歯牙にもかけなくなっていた。

当然両国から圧力をかけられたヴェネツィア政府であるが、それでも従来の政策である中立路線を続行すると宣言した。そして、ヴェネツィア共和国の政治担当者たちは、再編成を終わって南下を始めたオーストリア軍とフランス軍の対決の結果を見守った。戦闘は 96 年 7 月 31 日に始まり、8 月 5 日にフランス側の勝利が決定的になると、イタリア本土のヴェネツィア領はほとんどフランス軍に占領されたのと同じであった。食糧や家屋敷はフランス軍に徴発された。略奪や暴行事件も後を絶たなかった。このようにして、1796 年末には事実上、ヴェネツィア本国以外のイタリア

本土のヴェネツィア領はフランス軍の支配下に入っていたのであるが、翌97年春、ナポレオンはヴェネツィア共和国に対し公式に宣戦を布告したのである。それに対して、共和国政府は同年5月12日、戦わずに降伏することを決定し、ヴェネツィア共和国は終わりを迎えた。5月16日にフランス兵がヴェネツィアに上陸して占領を開始する。10月18日のカンポ・フォルミオ条約によって、ヴェネツィア共和国の領土は、オーストリアとフランスの間で分割され、本土の大部分はフランス領に、本土の一部とヴェネツィアの町、そしてアドリア海沿岸地方はオーストリア帝国領となるのである。スタール夫人がヴェネツィアを訪問したのは1805年の春、オーストリアによる占領の時代であった。

1805年12月、すでにフランス皇帝となっていたナポレオンはヴェネツィアを、自分の支配下にあるイタリア王国に編入した。そして、1814年にナポレオンが失脚すると、ヴェネツィアは再びオーストリアに占領される。しかし、やがて1861年に新しいイタリア王国が建国されてイタリア統一が実現すると、ヴェネツィアも1866年にこれに編入されることとなるのである。

### 3. 境界都市

スタール夫人はなぜヴェネツィアを『コリンヌ』後半の山場、恋人たちの別れの舞台に選んだのだろうか。その大きな理由として、前項で述べた歴史的状況と、この都市の「境界」としての地理的・文化的特徴が考えられる。『コリンヌ』は「北」と「南」の出会い、反発、魅惑の物語であるが、ヴェネツィアはそれに「東」と「西」、「海」と「陸」というそれぞれ相反する要素を付け加えることになるのである。

11世紀以来地中海を往来してオリエントとの貿易で富を築いたヴェネツィアには当然のことながら「東」、エジプトやトルコやさらにその彼方の国々の影響が目に見える形で存在している。

サン・マルコ広場は、青い天幕で囲まれて、天幕の下には大勢のトル

コ人、ギリシア人、アルメニア人たちが憩い、その端にある教会は、外観はむしろキリスト教の聖堂というよりモスクに似ている。この場所はオリエン特人たちの怠惰な生活を思わせ、彼らはカフェでソルベを飲んだり香り煙草を嗅いで毎日を過ごしている。ヴェネツィアでは時々、花の鉢を足元に置いたトルコ人やアルメニア人たちが屋根なしの小舟に呑気に横たわって通り過ぎていくのが見える。(397)

建物だけでなく、人々やその言語、衣服、食べ物、香りなど、ヴェネツィアを訪れる人々の五感すべてにその存在を主張するオリエン特。ものうげで怠惰なオリエン特人たちの醸し出す独特の雰囲気がある意味でオリエン特とオクシデントの両世界の境界に位置し、それらが混ざり合ってヴェネツィアのユニークな風景を構成していることがわかる。ここは、東西南北の異なる要素が出合うことのできる特権的な場なのである。

それでは、もうひとつの境界、「海」と「陸」の会合場としてのヴェネツィアについて考えてみよう。ブレンタ河がアドリア海にそそぐ河口の干潟に建設されたこの都市は文字通り陸と海の境界に作られたものであった。

ヴェネツィアに入ると、悲しみの思いが想像力をとらえる。植物には別れを告げる。この土地では蠅さえも見かけない。あらゆる生き物がここから追放されている。海と戦うために人間のみが残っている。(393)

語り手によると、この並はずれた都市にはイタリアのどの都市よりも社交があり、はなやかな社交界が存在するのである。ヴェネツィアに滞在している間にコリンヌはあちこちに招かれ、その才能によって人々を魅了するのであるが、1795年11月17日、ある貴族の館でゴッツィというヴェネツィアの作家の『空の娘、あるいは若き日のセミラミス』のヒロインを演ずることになる。伝説の女王の役を演じた彼女の歌と演技は大成功をおさめ、聴衆の賞賛にまるで本物の女王のような様子で応えるコリンヌであったのだが、まさにその直後に恋人の口からヴェネツィアを去ることが告げられるのである。「空の娘」は得意の絶頂から絶望のどん底へとつき

落される。コリンヌの部屋での悲痛な別れのあと、彼女は今一度オズワルドを呼びとめようと外へ飛び出すのであるが、その時すさまじい雨が降り始め、強風で彼女の家は海のただ中の船のように揺れるのである。

運河と家々を隔てる狭い石道を、コリンヌはひどく興奮して歩いていた。嵐はどんどんひどくなり、オズワルドを案じる彼女の恐れは刻々とつものった。あてずっぽうに彼女は船頭たちを呼んだ。彼らはその声を、嵐の中でおぼれている気の毒な人の苦しみの叫びと思った。だがだれも近づいてこなかった。大運河の荒波はそれほどすさまじかったのだ。(415)

ほんの数時間前には「空の娘」にして陸の女王であったコリンヌはこうして海の水と風によって打ちのめされるのである。ヴェネツィアでのエピソードのこのような幕切れは、もちろんその後の恋の破局と不幸を予想させるものとなっている。

#### 4. 共和政の考察

それではヴェネツィアでのエピソードのもうひとつの重要部分に入ろう。わずか2年後に最後を迎えることになる「共和国」をスタール夫人はどのように描いているのだろうか。まず、コリンヌとオズワルドはヴェネツィアの人々の衣服に目を向けている。

上流階級の男女は、黒い頭巾つきの外套を着ずに外出することはない。また、白い服にばら色の帯をしめた船頭が漕いでいるゴンドラもつねに黒色であることが多い。なぜなら、ヴェネツィアでは平等の方式が主に目に見えるものにたいして行きわたっているからである。(397)

国民の間に存在する富や権力の差をできるだけ見えなくする配慮を共和国はとってきたのであり、それが衣服に反映しているのである。そしてそれは奇妙な逆転現象を引き起こし、この国では、民衆が祭りの時のような

はでな衣装を身に付け、上層部の人々は、少なくとも外出時は、喪中のように地味な色を身につけているのであった。

また、この国では他国のように街中で兵士を見かけることはない。しかし、語り手は次のように続けている。

祝日に集まった3万人の人間を整然とさせるには、ふちなし帽に金貨をつけた国家警察の警官がひとり現れるだけで十分だった。もしこの分かりやすい権威が法の尊重からきているのであればりっぱなことなのだが、政府は治安を維持するために秘密の手段を講じており、この権威は恐怖によって強められていたのだった。(398)

このあとにドージェ宮の中にある牢獄の描写、密告が頻繁・制度的に行われていたこと、また死刑を宣告された者の秘密の処刑の恐怖について語られるのである。それではここでヴェネツィアの共和政についての詳しい説明を読んでみよう。

ヴェネツィア政府の権力は、その存在の最後の頃には、ほとんど習慣と想像力のおかげで成立していたのだった。昔の政府は恐ろしかったが、とても穏やかになっていた。昔は果敢であったのが、弱腰になっていた。昔は恐ろしげだったので、政府にたいする憎しみがたやすく生まれた。もう怖くなくなったので、それは容易に倒された。民衆の人気を必要とした貴族階級は専制主義的なやり方でそれを求め、民衆を楽しませるだけで、啓蒙はしなかった。ところが、民衆にとっては、楽しませてもらえるのが、なかなか快適なことだった。とりわけ、想像力にたいする好みがその風土と美術によって、社会の最下層まで浸透している国々においては。民衆には、彼らを愚かにするような粗野な楽しみではなく、音楽や絵画や即興詩人や祭りが与えられた。その点で、政府は国民に対して、ハレムに対するスルタンのように気を配った。政府は国民に、まるで女に言うように、政治に首をつっこまないように、当局の批判をしないようにとだけ要求した。だがその代わりとして、国民に多くの娯楽、十分な名誉さえも約束したのだった。(395-396)

この引用中の、政府は国民に対してハレムの女に対するスルタンのように気を配ったという表現に注目すべきであろう。ヴェネツィア共和国においては、「民衆」と「女」は同列に置かれていたのだ。楽しませ、甘やかすことはあっても、決して「男たち」(為政者たち)と同等に扱われることはなかったのだと語り手は主張するのである。

ところで、『コリンヌ』は今までしばしば最初期のフェミニスト文学とされることがあったが、「フェミニスト」という言葉を、女性の置かれた不当な状態を告発し、女性に男性と同様の権利を与えるよう要求するものであるとするなら、この小説をフェミニスト文学と呼ぶのは必ずしも正確ではないと思われる。しかしながら、たとえ声高に男女同権を主張することはないにしても、スタール夫人は自分の経験から、政治や学問など公的な分野で女性が排除されていることを苦々しく思っていて、それを『コリンヌ』中で、ある時はかなりあからさまに、またある時はほのめかしによって表明しているのは確かである。表面上は「民衆」のことを述べつつも、同時に「女」の状況について語る上の引用文は、典型的なこの「ほのめかし」の例であると言えよう。『コリンヌ』には政治の分野で腕を振るうような女性は登場しないが、ヒロインは即興詩人としてイタリアじゅうに知られ尊敬されているという設定である。一方、オズワルドの国スコットランドやイングランドでは、女性たちには家庭内の美德のみが期待され称えられるということになっている。イタリアでは、女性たちはまだ男性に影響力を持っており、それはヒロインの言葉によると中世的な騎士道精神のなごりということになる。イタリアと違って近代的な立憲君主政がうまく機能し、(オズワルドの父によれば)「政治制度が、男たちに行動したり意思表示をする名誉ある機会を与えている国々にあっては、女たちは裏方に留まらなくてはならない」(431)のであり、女性たちの出る幕はないのである。男女の性別役割分担が自明のものとされるかぎり、良き政体と、女性の自己実現の可能性の拡大は両立しないのであった。<sup>2</sup>

先に述べたようにスタール夫人がヴェネツィアを訪れたのは1805年、

2 以下参照のこと。坂本千代「スタール夫人の『コリンヌあるいはイタリア』を二十一世紀に読む」、『近代』110号、神戸大学近代発行会、2014年、1-15頁。

すでにオーストリア占領下の時期であった。また、その年にはナポレオンがローマ王として即位し、フランスがイタリアに厳然たる影響力を行使していた。多くのイタリア通のドイツ人から学び、また教養あるイタリア人の知人も多かった1805年のスタール夫人は、未来のことはともかく、イタリアの近い過去についてはかなり明晰な判断を下すことができる立場にあった。彼女が『コリンヌ』の物語を展開した1795年は、多くのイタリア人たちの間でナポレオン・ボナパルト将軍が知られ始めた年であり、ヴェネツィア共和国にとっては、2年後の崩壊の予兆がありながらも何とか平穏を保っていた年であった。北と南の接点（もうすぐ北に呑みこまれるわけであるが）であるだけでなく、東と西の出会う所、陸と海の文字通りの境界に位置する当時のヴェネツィアは、『コリンヌ』の舞台となるローマ、ナポリ、フィレンツェなど他のイタリアのどの都市よりも主人公ふたりの別れの場、まもなくやってくる恋の終わりを予感させる場として適切だったのであり、また、スタール夫人が共和政についての考察、民衆や女性の置かれた状況について自分の意見を述べるのにも好都合な都市であったのだと言えよう。